

横芝の碑

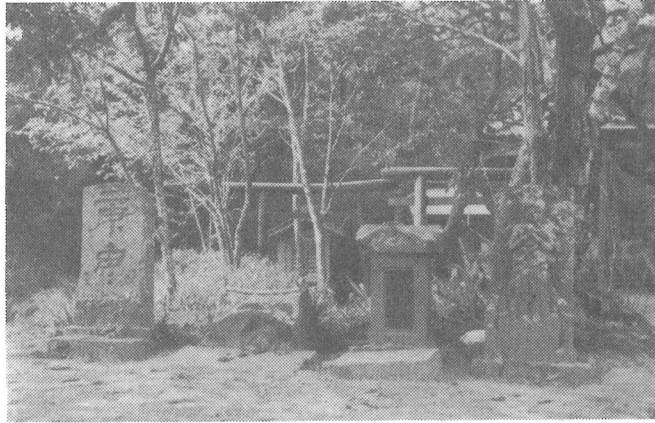
(その七十六)

庚申(かのえさる)の昔を語る

四社神社境内の庚申塚

「天正年間の庚申様が三本松に建っている」という噂を聞いたので早速オートバイを走らせました。庚申様はすぐに見つかったのですが、これに刻まれていた年号は天正ではなく大正でした。念のため近くのお宅で聞いてみますと「確かに大正の始めに建てたもので、当時この地区で悪疫が流行した。その頃地区に庚申様が祭られていたのだから、そのためかも知れない」ということから建てた。確か近くの地区に建てていた庚申様の分霊だと聞いている」という話でした。

庚申様や道祖神が地区毎に悪疫悪霊退散のために祀られているという話は聞いていますが、それにして悪疫退散の守神として分霊を勧請する程の庚申様なのです。ですから、きっと霊験あらたかな庚申様



▲“庚申歳に更新”変わらぬ信仰を伝える庚申塚

に異(ちが)いなと思ひ、それらしい庚申様を探し歩いて見ました。そうしますと、四社神社境内と立会に思ひがけない価値ある庚申様が存在していることを知ったのです。屋形四社神社は、平良兼館の伝説や里神楽、また人数限定三峰講中など、昔を伝える著名な社であ

ることは既にご承知のことと思ひます。

この神社の一の鳥居をくぐり、正面の二の鳥居に向って進みますと、ちょうど三峰様の前に当る参道の畔に一つの塚があつて、その上に四基の石像が建っています。これが昔からの姿を残している庚申塚なのです。

信仰の深さ伝える 六十年ごとの庚申

ずっと昔の庚申様は、土を小高く積み上げ、その上に青面金剛像を祭り、庚申(かのえさる)の歳毎に新しく造り直し、これを庚申塚(こうしんずか)と呼んでいたのです。因みに百科辞典等によりますと、塚とは墓、または物の標のため小高く土を盛上げた所、とあります。時が移り、申が猿に通ずるところから(本当は、申とは暦方で時日や方位を十二に配分した名称で、これを申(猿、酉、鳥、丑、牛、午、馬等と獣に例えたのは後世のことなのです)猿田彦命(さるだひこのみこと)と考えられてきたことや、猿田彦命が神々の道案内をされた、という故事から道祖神に結びつけて伝えられてきたことなどもあり、近世に

到つては道路改修や耕地整理のために遷座を余儀なくされ、次第に庚申塚の塚はなくなつてしまひました。横芝の庚申様も長倉と鳥喰下にだけ塚の面影をとどめていますが、これも六十年目に来る庚申歳に更新される風習を伝えるものは古老の口伝によるほか何もありません。

ところが、四社神社境内の庚申塚の石像に刻まれた文字は、はっきりとそれを物語つてくれているのです。

石像は四基建っていますが、一基の庚申様には、寛政十二年庚申(一、八〇〇)、また別の庚申様には万延元年庚申(一、八六〇)と刻まれていて、六十年目に改めて庚申様を建立した万延元年の人々の信仰を伝えているのです。氏子の人々は「この辺では庚申様を運んだり移したりはしませんよ。この庚申様はずうつと昔からここに建つていたと思いますよ。立会の庚申様だつて産土神様のすぐ後にありますが、ちゃんと別に祭つてありますよ。」ということでした。とにかく庚申塚の形態を残す価値ある存在であることは間違いないと思ひます。

立会の庚申様は、確か正徳年間の建立と記憶していますが、この庚申様もまたご紹介する価値があると思ひます。三本松の庚申様が果して何処の庚申様の分霊であるか

は別にして、近いうちに紹介させていただきます。思ひます。

○写真は庚申塚のもので一番右の庚申像には、寛政十二年庚申十一月吉日、屋形村荒場願主兵右衛門、儀右衛門。一番左の庚申塔には、万延元年庚申九月、西儀作之建。

中の祠形の石には、大六天、文化十二年乙亥二月当村新場郷中願主海保源〇、と刻まれています。荒場、の名称が大六天様では新場となつているのも面白く感じました。大六天様と庚申塔の間に頭笠だけの石がありますが、これには何も刻まれていません。四社神社には元禄年間に献納された御手洗が現存するくらいですから、あるいはさらに六十年前、あるいは百二十年前の庚申様かも知れません。後の鳥居は三峰様のもので、四社神社の本殿は右手のずつと奥です。(四社神社は既にご存知の場所です。今回も案内図は省略させていただきます。)

文化財審議会委員

小沢春光氏寄稿

